

10代の妊娠 休校で相談急増

中学、高校の生徒ら10代から「妊娠したかもしれない」との相談が、4月に入って急増している。病院や各地の支援団体への取材で分かった。新型コロナウイルス感染症拡大に伴う休校措置で交際相手と過ごす時間が増えた上、学校の性教育も不十分で避妊などの知識不足が影響している可能性がある。望まぬ妊娠に不安を抱えているケースが多く、専門家は「解決策はある。一人で悩まないで」と呼び掛ける。

新型コロナ

「休校中、親が居ない間に性行為をした。妊娠していたらどうしよう」「妊娠したが親には言えない」。熊本市の慈恵病院には各地の中高生からこうした相談が相次ぐ。

同病院は親が育てられない乳幼児を匿名でも受け入れる国内唯一の施設「ここのりのゆりかご」(赤ちゃんポスト)を運営。4月の中高生からの相談は過去最多の75件で、例年の約2倍に。相談は全国的に休校した3月ごろから増え始めた。新生児相談室の蓮田真琴室長は「未受診では母子に

神戸の助産院「一人で悩まないで」

危険を及ぼす恐れがある。少しでも不安があるなら相談してほしい。保護者も、子どもから打ち明けられたら怒らずに向き合ってください。

3〜4倍

妊娠や子育てに思い悩む女性向けの相談窓口「小さいのちのドア」でも2月末以降、「思いがけない妊娠」に関する連絡が増え続けている。これまで、相談全体のうち妊娠関連は6割ほどだったが、4月は8割を占めた。運営するマナ助産院(神戸市北区)の永原郁子院長は「件数は通常の3〜4倍。不安でいっぱいだろうけど、必ず解決の道があるから一人で悩まないで」と訴える。

この記事について考えたことを書きましょう。

多くは中高生ら10代。交際男性が相手だったほか、アルバイトでまず収入がなくなつてデートなどの対価に男性が金銭を渡す「パパ活」をしたケースも。永原院長は「性行為と妊娠とを結び付けて考えていない子もいる。命に責任を負う行為と知ってほしい」と危機感を抱く。

知識不足

青少年を対象に、性に関する正しい知識の普及に取り組むNPO法人「ピルコン」(東京)でも妊娠や避妊にまつわる10代の相談が増加。休校前に比べ、3、4月の相談件数はいずれも2・7倍。同居の家族らによる性暴力や「彼氏との性行為が嫌で、別れを切り出

したら『死ぬ』と言われた」などの相談もあった。一方、避妊方法や妊娠の仕組みを誤解している例もある。文部科学省が定める中学校の学習内容で性行為や避妊が取り上げられないため、正しい知識を学ぶ機会を持ってないことが影響している。

染矢明日香理事長は「きちんとした性教育を受けられないしわ寄せが若者や女性におよんでいる。性交後72時間以内の服用で妊娠を高確率で防ぐ『緊急避妊薬』の周知も不十分。どう情報を伝えるか普段から考える必要がある」と指摘する。各地の相談窓口は一般社団法人「全国妊娠SOSネットワーク」のホームページで検索できる。

■妊娠に関する主な相談窓口

最寄りの相談窓口は一般社団法人「全国妊娠SOSネットワーク」のHPから検索できる

SOS赤ちゃんとお母さんの妊娠相談(慈恵病院)

(0120)783449、メールも

小さいのちのドア(マナ助産院)

078(743)2403、メール、LINE(ライン)も

ピルコンにんしんかも相談(ピルコン)

LINEで友だち登録。相談を打ち込むと支援先含む情報を自動応答